

とう かし 塔の越遺跡

所在地 稲沢市長野
(北緯35度15分25秒 東経136度48分57秒)
調査理由 都市計画道路稲沢西春線建設
調査期間 平成19年4月～平成20年3月
調査面積 2500㎡
担当者 石黒立人・樋上昇・永井邦仁・早野浩二



調査地点(1/2.5万「一宮」)

調査の経過 塔の越遺跡の発掘調査は、都市計画道路稲沢西春線建設にかかる事前調査として、愛知県建設部都市整備課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査期間は平成19年4月～平成20年3月、調査面積は2,500㎡である。

立地と環境 塔の越遺跡は、市域を蛇行しながら南流する三宅川左岸の自然堤防上に立地する。遺跡周辺の標高は約6mである。遺跡の東には長野北浦遺跡、西には尾張国府跡が隣接する。遺跡は、稲沢市教育委員会によって1979年に緊急調査、1985・86年に第1次・第2次の発掘調査が実施され、第1次・第2次調査においては、古墳時代前期の土器群、古墳時代中期の円墳等が検出されている。

調査の概要 今回の塔の越遺跡の発掘調査においては、古墳時代、古代、中世、近世の遺構と遺物が検出された。主体は古代で、出土遺物量も最も多い。

古墳時代 古墳時代の遺構として、調査区東部をやや蛇行しながら通じる大溝0050SD等が検出された。0050SDは、最大幅約10m、深さ約0.5mを計測し、古墳の周溝とも推測される。0050SDを古墳の周溝とすると、古墳は、径約24mの円墳として復原される。また、0050SD周囲の土堤状の高まりでは、盛土中に埋設された土器集積0741SXが確認された。0741SXは、S字甕2個体、直口壺1個体、小型丸底壺4個体によって構成される。土器の型式は、松河戸I式初頭に相当する。同じく0050SDの周囲では、直口壺1個体を埋設した0256SK、調査区西部では竪穴状の窪地0673SBにS字甕1個体を埋設した0582SKも検出されている。土器の型式は、0741SXと同じく、いずれも松河戸I式初頭に相当する。その他、大型の土坑等も確認されたが、出土遺物はごく少なく、性格を判断する材料は乏しい。

古代 古代の遺構として、調査区西半を中心として多数の柱穴を確認し、数棟の掘立柱建物を復原した(一部、中世の建物を含んでいる可能性がある)。柱穴からはおよそ岩崎17号窯式～黒笹90号窯式の須恵器、灰釉陶器が出土していることから、遺跡においては、7世紀から9世紀を通じて掘立柱建物を中心に構成される集落が展開していたことが推測される。柱穴には長軸約1.2m、深さ約0.8mの大型のものもあるが、柱痕が遺存するものは少ない。他の古代の遺構としては、弧状に通じる溝、竪穴状の遺構等が確認されている。

出土遺物としては、須恵器、灰釉陶器、土師器に加えて、円面硯、瓦塔、製塩土器等がある。また、土錘の出土が多く、瓦が散見されることも特徴的である。瓦塔は、長野北浦遺跡出土の個体と接合し、1979年調査出土の個体とも同一個体とみられる。

中世～近世 中世の遺構は全体に希薄である。主要な遺構は、調査区中央付近において検出した12世紀後半の井戸0400SE、15世紀前半の井戸0690SE、調査区西部において検出した大溝0021・0022SD、調査区に散在する方形土坑等である。0400SEは、長軸約2.5mの方形縦板組隅柱式井戸で、方形の曲物を伴っていた。一方、0690SEは、径約5.5mで、構造物は何ら

確認されなかった。0021・0022SDは幅約3mで、上位は近世・近代を通じて再掘削される(007SD・008SX)。なお、方形土坑0425SKからは、古瀬戸灰釉貼付牡丹文筒形香炉が出土した。

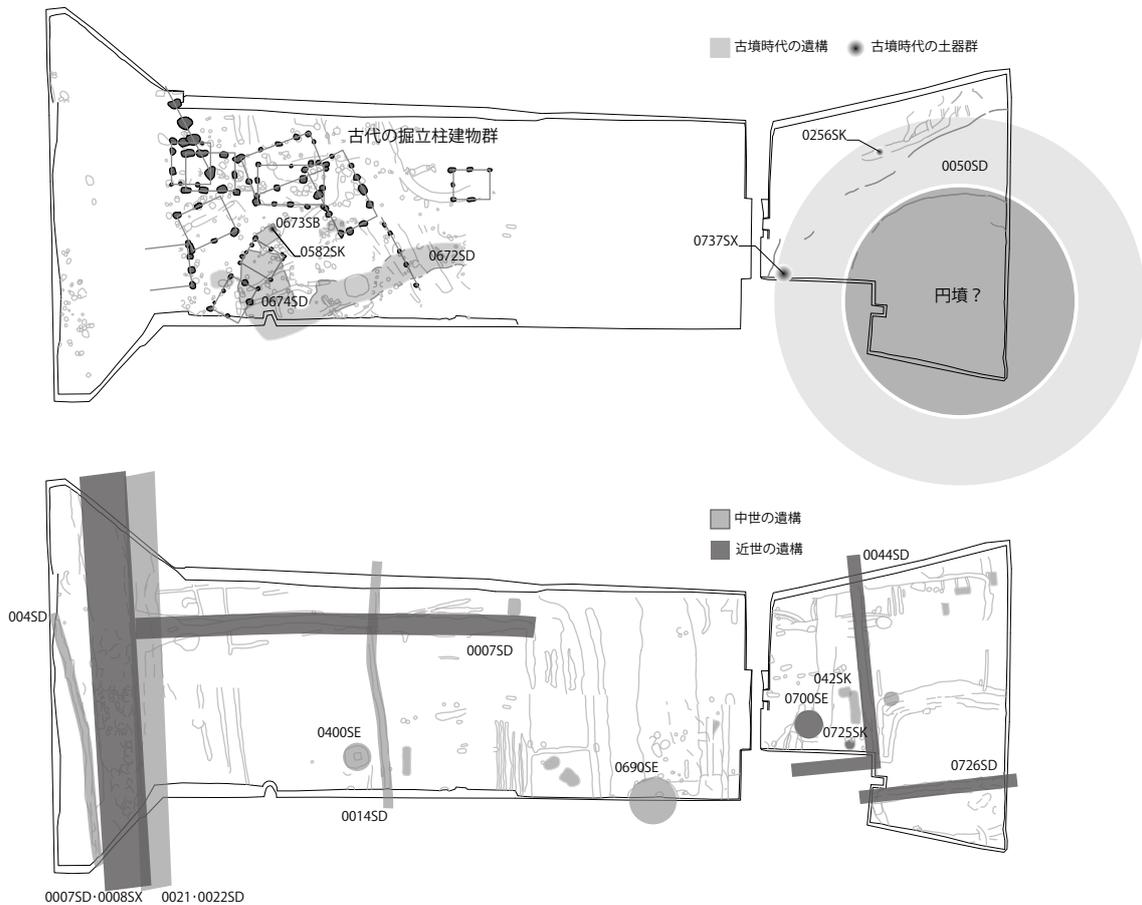
近世の遺構としては、調査区東半を中心に16～17世紀の区画溝、井戸等が確認された。調査区を南北に通じる0044SDからは、焙烙鍋、型打皿、丸碗、石硯等の遺物が豊富に出土した。0700SEは径約3mの結桶井戸であるが、結桶は抜き取られていた。その他、調査区中央において、近世以降の水田を検出した。

ま と め 今回の調査で、塔の越遺跡は、古墳時代、古代、中世～近世の複合遺跡であることが明らかとなった。また、調査区の西半は古代、東半は中世～近世の遺構がそれぞれ主体であることから、長野北浦遺跡と塔の越遺跡の実質的な境界は、今回の調査区の中央付近に求められることになると思われる。

古墳時代の大溝0050SDが古墳の周溝であるとする、長野北浦遺跡から塔の越遺跡にかけて、連続して前期の古墳が点在する景観も復原されることになる。土器集積0741SXは、第1次調査の土器溜りSX01と出土状況が類似することも注意される。

古代の遺構と遺物は、今回の調査成果の主体となるもので、遺構、遺物の内容からは、遺跡の西に隣接する尾張国府跡との密接な関係も推測される。また、7世紀から集落形成が活発化する点は大いに特筆される。

中世～近世の遺構は、調査区東半を中心に展開する。これらは、長野北浦遺跡から連続する遺構群と推測される。
(早野浩二)



主要遺構配置図 (1/800)



調査区北西部



古代の掘立柱建物群



調査区北東部/0050SD



調査区南西部



調査区南西部/0672・0674SD周辺



調査区南東部/0050SD周辺



0050SD



0582SK



0741X (1)



0741SX (2)



大型の柱穴



0400SE



0044SD